慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『雨月物語』における「貧福論」の位置
Sub Title	
Author	大輪, 靖宏(Owa, Yasuhiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1977
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.36, (1977. 3) ,p.100- 111
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00360001-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『雨月物語』における「貧福論」の位置

大輪靖宏

一

『雨月物語』の諸短編についての考察は従来から盛んであるが、「貧福論」については、正面からこれを論じたものがきわめて少ない。それは「貧福論」という短編の特異性によるところが大きいからであり、この短編を『雨月物語』の他の八編と同列には論じられないことに原因があろう。この点について重友毅氏は「『貧福論』の解釈」(『雨月物語の研究』所収)において次のように述べておられる。

> 『貧福論』もまた、在来の批評家によって、著しくその価値を低く見積られてゐる。だが、それは彼等の理解の浅さを、同時に研究態度の不徹底を、みづから表白するものと言はなければならない。もとよりそれが怪奇の色彩に乏しく、巻頭の『白峯』をはじめとして、恐怖と戦慄の場面に慣れ来つた読者をして、聊か期待はづれの感を抱かしめるものであることも否めない。またそれが殆ど抽象的論議に終始し、知識に訴へる要素が多過ぎるばかりでなく、そこにはまだ十分な整理の手が加へられず、中に矛盾・撞著を含んで、やゝ混濁の色を示してゐることも、欠点と言へば言へるであらう。更に全体の構成が問答体から成ってゐることは、これに小説的結構を与へて、それが一篇の議論文と成り了ることを防ぐものではあつたにしても、それは『白峯』の崇徳上皇と西行の問答の如く、両々相対峙して下らず、共に他を説得せずんばやまずの概を以てなされるのではなく、一方の問ひに応じて他方が答へること、恰も平凡なる教室における平凡なる教師と生徒の問答の如く、概して平板・単調に流れてゐることも、その魅力を失ふ所以であつたこともまた確

かであらう。しかしこれらの故を以て、その価値を著しく軽視し、もしくは無視することの誤であることは言ふまでもない。それは対象を興味本位の読物として取り扱ふ場合においてのみ許されることであり、さうした恣意的な選択を先立てる以上、九篇の説話を含む『雨月』が、全体として占める位相は、つひに明かにされることはないであらう」

重友氏はこのように「貧福論」を『雨月物語』の中の一編としてあくまでも全体的な見地より考えねばならぬことを提唱され、「貧福論」が単なる間に合わせで『雨月物語』の中に加えられたものではないとして、「一時の間に合はせとして そこに取り加へられるものは、恐らくはかやうな特異な色彩をもつものとは反対の、従つてそれまでに物語られて来た説話と同じ調子のものであつたらうと見る方が、寧ろ自然ではあるまいか。そしてそのやうな説話ならば、既にそれまでの諸説話が示してゐるやうに、和漢の典籍を駆使するに相当の才能をもつ秋成にとって、その制作は恐らく容易であつたであらう」と述べておられる。

「貧福論」が『雨月物語』中の一編として加えられたについては作者秋成に何らかの積極的意図があったという重友毅氏の意見に対しては、鵜月洋氏も賛意を表しておられ、「『貧福論』の意義と位相」(国文学論叢6)において次のように述べておられる。

「……私もこの説には全面的に賛成です。なぜ賛成かといえば、いまここで、『雨月物語』の中ではわりあいに構想やプロットの単純な『白峯』であるとか『仏法僧』であるとかを『貧福論』と比較してみますと、これらの作品はいずれも、秋成が小説を媒体として自己の史観なり学識なり人生観なり批評精神なりを、対話形式というかなり素朴でナマなかたちでうち出したものであって、文学のもつ目的意識や意図性という点からいえば、『貧福論』もそれと同質同位の作品であることがわかるからであります。……『貧福論』という作品は、『雨月物語』を怪異小説とだけ受けとったばあいには、たしかにその位相において全体からやや遊離した異色篇とよぶことができるかもしれませんが、作者の側に立って考えれば、けっして特異な作品でもケタはずれの作品でもなかったということです。むしろ秋成にとっては、自分の抱懐する見解なり批評精神なりを、こうしたかたちで作品のうえにうち出すことが、作家としての本懐であり生きがいであり使命であって、それをモティーフとしてこそ創作意欲がたかめられ、作家的良心が充足されたといえるのではないでしょうか」

このように重友氏も鵜月氏も、「貧福論」を『雨月物語』の中の例外的な作品として扱うことをせず、作者秋成の明らかな意図のもとに『雨月物語』に加えられた作品と考えておられる。そして、「貧福論」が『雨月物語』に加えられた理由としては、この作品の中で展開される金銭論が秋成にとっての重要な発見であり、ぜひとも語らねばならぬ事柄であったと考えておられる。

現在のところ「貧福論」についての論はこのお二人の意見に尽きるのであり、私自身も両氏の御意見に格別の異を唱えようとするものではない。それどころか、「貧福論」が秋成の積極的な意図のもとに『雨月物語』に加えられていること、「貧福論」の中で展開されている金銭論が秋成にとってきわめて大切な議論であったことの二点については、全くその通りであろうと思っている。只、それにもかかわらず、私は「貧福論」を『雨月物語』中の他の八編と全く同一に考え、それらの中に埋没させてしまうことにはためらいを感じる。むしろ、この際「貧福論」の特異性をもっとつきつめて考えるべきではなかろうかと思うのである。と言うのは、「貧福論」には諸家の指摘された以上の多くの特異性があると私は思うし、この特異性が秋成をして『雨月物語』と同傾向の作品の創作を二度と行なわせなかったことの原因となっているのではないかと思っているからである。

前置きが長くなったが、こうした問題をこれから考えてみたいと思う。

二

鵜月洋氏は、先に引いた御論考において、「貧福論」に盛られた論議は秋成が小説を媒体として自己の思想を述べたものであるから、文学の持つ目的意識や意図性という点から言えば「貧福論」も「白峯」や「仏法僧」と同質同位の作品であると言っておられる。まず、この点から考えてみよう。

確かに「白峯」や「仏法僧」には作中に論議が持ち込まれている。その点では「貧福論」と共通点があると言うことは出来る。しかし、この共通点とは作中に論議が持ち込まれているという形式上の共通点に過ぎない。その論議が作品の中でどのような働きをしているかという問題にまで立ち入ってみれば、全く異質の作品とも言い得るのである。

「白峯」という作品は確かに崇徳院と西行との間に戦わされる議論が中心となって発展しているが、この作品の場合にはそうした議論を述べることが作品の目的になっているわけではない。議論を戦わせることによって、そこから当事者達の（特に崇徳院の）人間性というものを浮き立たせて行こうとしているのである。このことについては、かつて「雨月物語に描かれた人間」（拙著『上田秋成文学の研究』所収）においてくわしく検討してみたことがあるが、今、論を進める便宜上、簡単にそれを復習しておきたい。

崇徳院は自分を悲境に陥れた人間達に対し、激しい怨念を持っていた。その怨念によって崇徳院は次々と復讐を行なっていくのであるが、そこには自分の行為を正当化する一つの論理があった。それは中国の簒奪革命理論を自分の実際の状況にあてはめたもので、「臣として主君を討った場合であっても、天に応じ民の望みに従った場合には正しいとされる。まして、自分はもともと天皇として天下を支配すべき立場の人間であるのだから、変則的な牝鶏の支配する世を覆そうとするのは間違っていない」とする論理である。この論理は、崇徳院の保元の乱における行動を正当化するとともに、現在敗者として勝者達に復讐しつつある行為をも正当化するものであった。しかし、崇徳院のこの論理は西行の反論によってあえなく潰えてしまう。西行は史上より菟道稚郎子の例を引き、その行動を崇徳院と比較することによって、崇徳院の行動は結局のところ人欲より生じたものであることを指摘する。そしてさらに西行は、崇徳院の論理の根拠たる簒奪革命説そのものを批判し、崇徳院の行為には何らの正当性もないことを述べるのである。ここにおいて崇徳院は「今事を正して罪をとふ、ことわりなきにあらず」と自らの非を認めるに到るのであるが、しかし、崇徳院の悲劇はそれだけでは終らない。自分の行動の正当性を否定された崇徳院は、それでも（むしろ、「それゆえにかえって」と言うべきであろうか）ますます自分の感情の高ぶりをおさめることが出来ないのである。西行を前にして崇徳院はさらに言葉をつぎ、今までに自分がいかに苦しめられたか、それに対して自分がどのような復讐をしたかを述べたてる。これはもはや論理ではない。感情の流露というに過ぎないものである。論理には論理で立ち向った西行も、感情は論理で押さえられぬことを知っており、荒れ狂う崇徳院の霊を前にしてついに沈黙してしまう。西行に出来ることとしてわずかに残されているのは、歌に託して随縁のこころを勧めることだけであった。しかし、これとても、崇徳院の感情の炎を消すには何らの力も持たない。崇徳院の復讐はなお一層の激しさをもって進んで行くことになるのである。

「白峯」という小説は、このように崇徳院と西行との論争を通して、一人の人間の悲劇を描こうとした作品であった。ここで戦わされる論争は決して程度の低いものではなく、又、作者秋成の思想とも決して無縁のものではない。しかし、この作品の価値は、この論争によって示された思想的価値によるものではなく、論争が展開して行くに従って次第に浮き彫りにされて行く崇徳院の人間性というものにある。一人の人間が正当と信じられる論理のもとに行動をしている。その論理が打破されたとき、この人間はそれでも自分の行動を止めることが出来ない。人間は感情に支配されている動物であり、我々が絶対的な論理と思っているものも自らの感情に合致するよう作り上げられたものであることが多い。人間は、論理でもって行動していると自らは信じているが、その行動を根底で支えているのは実際は感情なのである。だから、人間は論理を否定されても、なお感情に引きずられて自分の行動を止めることが出来ないのである。崇徳院の悲劇はここにあり、こうした崇徳院の悲劇を描いたものが「白峯」である。そして、「白峯」の中に持ち込まれ展開されて行く論議は、理性では押さえられぬ感情を持つ崇徳院の悲劇を描き出すのに最も効果的な道具として働いているのである。

さて、この辺で話を「貧福論」に戻さなくてはならない。

「貧福論」もまた、表面的には「白峯」と似ており、論議を中心として作られた作品である。しかし、「貧福論」における論議は、「白峯」における論議のように、人間というものを描き出すのに効果的に働いているだろうか。論争が進むにつれ、作中人物がそれに反応を示し、そこから人間の持つ業とか性とかが浮き出て来るだろうか。

「貧福論」に出て来る岡左内は、冒頭のところで、小判一枚を持っていた男を厚く賞したというエピソードによってその個性が語られるが、黄金の精霊が現れてからは全く没個性的な聞き手になってしまう。勿論、左内も只聞いているだけでなく自分の意見も言うのであるが、それは個性を発揮しての反論ではなく、黄金の精霊の意見をさらに引き出すための発言であるに過ぎない。従って、こうした黄金の精霊との対話の中から岡左内の人間性が浮き出て来る筈はなく、重友毅氏が「恰も平凡なる教室における平凡なる教師と生徒の問答の如く」と言われた通り、黄金の精霊の一方的な弁舌のうちにこの作品は終るのである。又、「貧福論」は黄金の精霊の姿に託して人間を描こうとしたものでもない。人間以外のものを主人公としていても、そこに人間性が託されていれば、それはやはり人間を

描いた作品と言って良く、そうした観点から動物などを主人公として創られた作品というものは我々の周辺に数多く存在する。現に『雨月物語』においても、秋成は「蛇性の婬」において「年経たる蛇」を主人公とし、その化身たる真女児を通して女の（人間の）或る一面を描き出そうとしている。しかし「貧福論」の黄金の精霊は、単に金銭論を述べるためにのみ登場して来るのであって、意見を述べることによって人間性が発露されるというようなことは全くない。

結局、「貧福論」は、論議を通して人間を描こうとした作品ではなく、論議そのものを述べようとした作品ということになる。そして、「白峯」と「貧福論」とは、共に作中に論議が持ち込まれているとは言っても、作品そのものの目的は全く違っていると言わなければならないのである。さらに又、このことは、『雨月物語』の中で「貧福論」だけが人間を描くことを放棄している作品ということにもなる。「貧福論」を除く『雨月物語』の他の八編はいずれも人間を描いている。「仏法僧」のように一見秋成が自分の学説を披瀝したいがために書いたように見える作品であっても、秀次という人間を通して秋成は人間の或る面を描こうとしているのである。即ち、秋成は、「白峯」において報復に向った崇徳院の姿を描き、今度はその裏返しのテーマとして「仏法僧」において生前に崇徳院と同じような仕打ちを他人から受けながらも報復には向かわない秀次の姿を描いているのである。（前掲「雨月物語に描かれた人間」参照）――もっとも「仏法僧」は、「白峯」ほどには作品の出来が良くないので、この作品に使われている古歌の解釈についての論議は「白峯」における論議のようには生かされていない。しかし、秀次が女々しい怨念などに囚われていないことを示すために穏やかな宴の有様を叙する必要があり、そのために宴の席上において古歌の解釈などが語られているのだと言うことは出来よう。

「白峯」における簒奪革命説を中心とする論議、「仏法僧」における古歌の解釈についての論議、「貧福論」における金銭の動きについての論議――これらはいずれも秋成にとって得意の論であり、論そのものの価値は甲乙つけがたい。しかし、これらを小説作品として見るとき、論議のはたす役割は、「白峯」「仏法僧」と「貧福論」とは全く違ったものだと言うことになるのである。

三

『雨月物語』における諸短編の中での「貧福論」の特殊性というのは、一口に言えば、他の八編は人間を描くことを目的としていて論議その他はすべてそのための材料であるのに対して、「貧福論」はその中で展開されている論議そのものが目的であるということになる。確かに、ここに展開されている金銭論は、すでに諸氏の指摘しておられる通り、秋成が何とかして現実における金銭の動きを説明しようとして苦労した挙句、ようやく得られた結論であるらしい。従って『雨月物語』創作時の秋成にとっては一応満足すべき結論であり、それをこうした形で世に問おうとしたこともまた当然と思える。

しかし、ここでの金銭論が秋成にとっていかに大きな価値を有していたにしても、それはあくまでも思想的な価値であって、文学的な価値ということになれば問題は自ら違ってこよう。実際、我々は『雨月物語』の諸短編を文学的に評価しようとする場合には、「貧福論」は除いて考えなければならないのである。そしてこのことは、すでに作者たる秋成も意識していたことではないかと思われる。それは「貧福論」という題名の付け方にも伺われると思う。秋成の小説作品には、『雨月物語』『春雨物語』中の諸短編を見渡しても、初期の浮世草子作品やその他を見渡しても、「――論」と名のつく小説作品はない。小説作品にはいずれも小説作品らしい題名がつけられている。『春雨物語』には終始論議のみでその論議を口にする人物すら登場せぬ「歌のほまれ」が存在するが、この場合であっても秋成はこれに「――論」という題名はつけていない。秋成は『春雨物語』を書く頃になると、歴史を語っても文芸を語っても、それを通して人間を語り得るならば物語であるという考え方を持つに到り、類歌論に終始した「歌のほまれ」をも物語の範疇に入れているのである。『春雨物語』を書いた頃の秋成はすでに古典研究や歌や文を多く世に問うており、発表の手段はいくらでもあった。事実、「歌のほまれ」と類似の意見は『金砂』や『遠馳延五登』に見られる。それにもかかわらず、これを『春雨物語』の中に入れているのは、物語というものに対する秋成の一つの姿勢を示すものである。しかし、「貧福論」の場合は事情が違っている。『雨月物語』を創作した当時の秋成にはまだ発表の手段はそれほど多くない。自分が苦労して考え出し何とかして世に問いたいと思っている思想が「貧福論」

なのであるから、これを物語集の中に入れて発表したからと言って、必ずしも秋成がこれを物語と考えていたということにはならないのである。物語集中の一編の名としてはふさわしくない「――論」という題名はそうした秋成の姿勢を示しているように思われる。

もっとも、思想を述べることが目的の書で俗耳に入りやすいよう問答体をとった作品は、我が国に数多く存在する。しかもそれらが「物語」を名乗っていることもまた珍しくないのであって、仮名草子の中には『清水物語』『祇園物語』などこうした形式を持つ作品は多い。従って秋成も、自分の創り出した金銭論を黄金の精霊と岡左内との問答という形で表現し、それを『雨月物語』という「物語」の中に入れたことについては何ら心理的抵抗はなかったであろう。むしろ、そうした先例が数多く見られるから、秋成としても安心して自分の思想をこうした形で『雨月物語』中の一編として収めたのだと思われる。この意味で「貧福論」が『雨月物語』の中に収められていることは何の不思議もないのであるが、だからと言って、「貧福論」が『雨月物語』において他の八編と全く同質の作品ということにはならないだろう。「貧福論」が人間を描くことを目的とせず論議そのものが目的の作品であるということ、又、秋成もそれを意識していたらしく「――論」という題名をこれに付していることなどは、依然として「貧福論」の特異性として残るのである。

四

文学作品として「貧福論」を考えてみた場合、その特異性は今までに述べて来たようになるのであるが、次にこれを思想的な観点から考えてみたらばどうであろうか。「貧福論」を支えている思想と他の八編を支えている思想は同じであると言い得るだろうか。この点についても、私は両者の間に大きな差異があると思う。それは、結論を先に言ってしまえば、モラルというものに対する考え方が「貧福論」と他の八編とでは違うということである。「貧福論」を除いた『雨月物語』の八編ではいずれもモラルが重視されており、人間を動かす根幹として捉えられている。しかし、それに対して「貧福論」ではモラルの及ばないものを考え始めているのである。

かつて私は「雨月物語を支配する論理」(『上田秋成文学の研究』所収)において、「菊花の約」を考察の出発点とし、そこにおける赤穴宗右衛門の行動や、とりわけ赤穴丹治に対する丈部左門の論理を考えてみた結果、「どんな難しい状況であっても、人間は、誠意と知

恵とで、自己を曲げずにモラルにそって生きていくことができる筈だ。又、モラルとはそのようにして守られるべきものだ」という、秋成のモラルに対する厳しい考え方が作品の基底となっていることを述べた。そしてこれを他の短編の上へ拡げて考えてみても、少しの矛盾も生じないことも合せて述べた。『雨月物語』においては、モラルの上において欠点のない人間が不条理な力によって不幸に陥るということは起らない。「吉備津の釜」における正太郎の如く不幸な結末に陥る人間も居るが、この場合には、作品の前半部において正太郎がモラルを踏みにじったことが説明されているのである。「青頭巾」の僧の如く悪を行なった人間であっても正道に戻らんとする努力を必死に行なえば救われることになる。『雨月物語』はいわゆる勧善懲悪の文学ではないが、人間の種々相を描き出すにあたって、常に既成のモラルにそって（或は、既成のモラルに抵触しないように）人間の姿を取り出して見せているのである。そして、このことは神の世界にまで拡大されて適用されている。大きな魔力を持つ「白峯」の崇徳院にしても忠信の徳を持つ重盛には手が出せないし、「青頭巾」の食肉鬼も大徳の聖である快庵には手が出せない。『雨月物語』の世界ではこうしたルールが根底にあり、その上で人間というものを考えようとしているのである。人間の行動や運命の上にモラルというものが大きく関与しているのである。

こうしたことは『雨月物語』の諸短編のうち八編にまでは言い得ることであるが、いま話題としている「貧福論」にだけは通用しない。「貧福論」の中で岡左内は黄金の精霊に向って、金銭が貪酷残忍の人のもとに多く集まり清廉の士のもとに集らないのは何故かと尋ねている。実際我々は金銭の動きがモラルとは無関係であることを経験的に知っている。上田秋成も貨幣経済の発達した近世の人間であり、しかも大阪の商家の出身であるから、当然、金銭の動きについては関心が深く、それがモラルとは無関係であることもよく知っているのである。しかし、『雨月物語』の「白峯」から「青頭巾」にいたる八編においてはこの問題に触れずに来た。或は、触れる必要がなかった——。だから、「白峯」から「青頭巾」までの八編は、モラルという点については少しの破綻をも見せることはなかったのである。しかし、「貧福論」において秋成はモラルとは関係のないものをついに取り上げざるを得なくなった。このことは、それまで構築して来た『雨月物語』の世界の根本を否定することであった。岡左内の質問も、すでに金銭の動きがモラルとは関係がないことを当然のこととした上での質問なのである。

岡左内の質問に対して黄金の精霊はこう答えている。「卑吝貪酷の人は、金銀を見ては父母のごとくしたしみ、食ふべきをも喫はず、穿べきをも着ず、得がたきいのちさへ惜とおもはで、起ておもひ臥てわすれねば、こゝにあつまる事まのあたりなることわりなり。我もと神にあらず仏にあらず、只これ非情なり。非情のものとして人の善悪を糺し、それにしたがふべきいはれなし。善を撫悪を罪するは、天なり、神なり、仏なり。三ツのものは道なり。我がともがらのおよぶべきにあらず。只かれらがつかへ伝く事のうや〳〵しきにあつまるとしるべし」

ここで黄金の精霊もまた完全に金銭の動きを善悪と切り離してしまった。モラルの上で欠点を持つ人間であっても富を有することはあり得るというのである。金銭が人間の生活の上にあまり影響を与えないものであるならば、こうした結論が出ても一向さしつかえないが、金銭は人間の行動や幸不幸にかなり大きく関与するものである。これが善悪と関係ないということになれば、もはや人間の行動や幸不幸はモラルを基幹として考えて行くだけでは不十分になってくる。そして、モラルだけで人間を律しきれないとなれば、改めて人間を動かしている諸条件を考え直さなければならないことになり、それは、これまで構築して来た『雨月物語』の世界の論理を全て御破算にすることになるのである。

勿論、「貧福論」はまだそこまで考えてはいない。人間というものを根底から考え直し、それを文学の上に表現して行くことは、これから三十余年後に秋成が書く『春雨物語』まで待たなくてはならない。そして、『春雨物語』では、「貧福論」における如き、金銭は善悪によって動くものではなく已れを可愛がってくれるかどうかで動くのだというような単純な論理は姿を消してしまう。その意味で「貧福論」の論理はまだまだ不徹底である。そもそも「貧福論」において、金銭は何故心正しい人のもとに集らないのかという問いかけを設けること自体、まだ作者の考えがモラルに囚われていることを示している。モラルを根底において物事を考えているからこそモラルに反する金銭の動きに注目しないわけにはいかなくなるのである。この点では「貧福論」の出発点は、モラルを根底において人間を考えてみている他の八編と同じであると言える。だから、秋成としては何とか倫理的に納得の行く答を出したかったのではなかろうか。しかし、秋成の努力をもってしても、金銭の動きだけはモラルで説明することは出来なかった。従って——おそらく、やむを得ず

であろうが——秋成はついに金銭をモラルから切り離すのである。

「貧福論」という小説は、他の八編と同様、モラルを根底において出発している。その点では確かに『雨月物語』中の一編であるべき作品である。しかし、ここでモラルと無関係なものを人間社会の中に見出したという点では、「貧福論」は他の八編と全く違った性質を持っているのである。

五

「貧福論」という作品は、このように『雨月物語』の中では、きわめて特殊な性格を持っている。「貧福論」の特性として挙げるべきものは右の二点で良いと思うが、なお細かな点を言えば、神と人間との距離が著しく遠くなっていることも挙げられよう。「白峯」から「青頭巾」に到る八編の主人公達は、いずれも元は人間であった者が超現実の世界に入っている（「蛇性の婬」だけは邪神が人間になる）。このように『雨月物語』の世界では神と人間の距離はそれほど遠くなく、人間はしばしば超現実的なものに変身するし、神もまた人間に変身する。そして、人間は超現実の世界に入っても人間的な心情を失なわないし、「蛇性の婬」のように邪神が人間になった場合でも心情は人間と同じである。『雨月物語』の世界では人間世界の延長として神の世界があるのであり、能力差を別にすれば、両者の間には本質的な違いはない。

これに対して「貧福論」では、黄金の精霊が人の形を借りて姿を現わすとは言っても、黄金の精霊は決して人間の生活には入り込まず、又、心情的な面においても「これ金に霊あれども人とこゝろの異なる所なり」と言って人間とは別の存在であることをはっきり言っている。晩年の秋成は「神は神にして、人の修し得て神となるにあらず。……さればこそ人の善悪邪正の論談なき歟」（胆大小心録）と言っていて神と人間とを全く別のものと考えているが、「貧福論」にはその萌芽が見られると言えよう。

すでに重友毅氏や鵜月洋氏が指摘しておられるように、「貧福論」に盛り込まれたものは秋成が苦労して得たものであり、その意味では、これがいかに「——論」という論議中心のものであろうとも『雨月物語』の中に加えられておかしくはなかった。しかし、この

結果として秋成が得たものは、今まで見て来た如く、『雨月物語』の世界に対する根本的な疑問であった。「貧福論」における論理を押し進めて行けば、秋成は、モラルを中心として組み立てて来た『雨月物語』の世界をどうしても否定しなければいけないことになってくる。「貧福論」は『雨月物語』の中に入るべき要素を持った作品であるが、それとともに『雨月物語』そのものを否定する作品なのである。

従来の研究は、「貧福論」を『雨月物語』中の一編として考えようとするために、他の八編との共通性に重きがおかれていた。しかし、「貧福論」には、今まで述べて来たような特異性があることも事実なのである。そしてこの特異性は、秋成をして第二の『雨月物語』創作に向わせなかったこととも無関係ではないと思う。

上田秋成は、『雨月物語』の後、長い間にわたって同種の作品を創ろうとはしなかった。そして、晩年に到って、ふたたび物語作品に手を染めたとき、そこに創られた『春雨物語』は『雨月物語』と全く異なった論理のもとに成り立っていたのである。そうした秋成文学の展開を考えるとき、「貧福論」という作品はきわめて大きな意味を持っていると思う。